

KATSUHIKO HIRANO

Vol. 50
2022 SPRING

LINKAGE

[繋ぐ]

アーティスト／東京藝術大学学長

日比野 克彦 さん

(一財)C.W.ニコル・アフアンの森財団

理事長 森田 いづみ さん / 専務理事 野口 理佐子 さん

THEME 持続可能な社会へ向けた取り組み

創刊50号記念

50 issue

SPECIAL
INTERVIEW

国際紙パルプ商事(KPP)が発行するTSUNAGU(繋ぐ)は「紙の魅力再発見」をテーマに、紙と文化・紙と事業・紙と人を「繋ぐ」広報誌です。

SPECIAL INTERVIEW

part.1 P01

アーティスト/東京藝術大学学長
日比野克彦 さん

part.2 P10

(一財)C.W.ニコル・アフアの森財団
理事長 森田いづみ さん
専務理事 野口理佐子 さん

特別企画 P06

祝! 創刊50号記念
スペシャルメッセージ

拓く P13

循環型社会の実現に向けた
KPPグループの最新ニュース

深める P16

ビジネスソリューションサイト
「SHIFT ON」を開設

伝える P17

ヒット商品の仕掛け人が綴った
近況を伝える1枚の絵はがき

訪ねる P19

新たなコミュニケーションを生み出す
注目のブックカフェにフォーカス

作る 付録

開運招福!
「招き猫のペーパーオブジェ」

KATSUHIKO HIBINO

日比野 克彦

1980年代に段ボールを使った作品で脚光を浴び、広告や舞台美術など幅広いフィールドで活動してきたアーティスト・日比野克彦さん。

近年は自身の作品制作だけでなく、一般参加者とのコラボレーションを通じて、その地域の特性を生かしたアートワークを展開しています。

終わりの見えないコロナ禍や国際情勢の不安によって環境が一変するなか、日本アートの最前線で活躍を続ける権威は社会の変化をどう読み、次に何を仕掛けようとしているのか。その言葉から、未来をつくるヒントを探ります。



日比野克彦

アートは人の心を動かすものだからこそ、
社会課題の解決に貢献できると思う。

——日比野さんは、芸術のジャンルを横断する多彩な表現活動を続けていますが、それぞれ取り組み方にどのような違いがありますか？

僕がアート活動をスタートしたのは1980年代の中頃でしたが、当時はアートに対する価値観が変化し、時代を反映した新しいものが求められている時代でした。1970年に大阪万博が開催されて都市のインフラ整備が進む中で、新しいものを創っていかうという空気感があつたんです。音楽では坂本龍一さん、演劇では野田秀樹さんなどそれぞれの芸術領域で新しい表現が誕生する一方で、アートでも美術館を飛び出し、都市空間を新しいメディアとして利用するストリートアートが増えていきました。そういった時代の動きの中で僕自身も自分の感性をさまざまなメディアで発信する活動が増えていきました。編集者と組めば雑誌に、アパレルメーカーのディレクターと組めば洋服に、演出家と組めば舞台美術というように、僕自身がやっていることは変わらないんですけど、誰とどんな風に出会うかで、その物語が変わっていくというわけです。

——近年はご自身の作品制作だけでなく、地域住民との共同制作によるアートプロジェクトなど、さらに活躍のフィールドを広げている印象がありますが、どのような心境の変化がありましたか？
大きな潮目となったのは、1980年代前半のバブル崩壊かもしれませんが、それまで右肩上がりだった経済に陰りが見えはじめると同時に、阪神淡路大震災(95年1月)や地下鉄サリン事件(同年3月)などそれまでの価値観を大きく揺るがす出来事が次々と起きました。そんな時代だからこそ、

他者とのつながりや心の輪みたいなのが求められていたし、アートだからこそ、人と人、人と地域、地域と地域をつなぐ役割が担えるんじゃないかと思いはじめたわけです。アーティストが現地へ赴き、その地域の人々との交流を通してその土地ならではのアート作品を共同制作する。アートプロジェクトを通して、地域の魅力や社会的課題を発信する活動を続けています。

——そのひとつが、「明後日朝顔プロジェクト*1」というわけですね。

これは2003年の「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ」ではじまったもので、新潟県にある集落の方々と一緒に朝顔を育てるという、プロジェクト型の作品です。新潟で収穫した朝顔の種が集落の方々の思いや記憶とともに全国各地に運ばれ、さまざまな土地で同じ光景を生み出す。朝顔の種が橋渡し役となって、地域や人々同士のコミュニケーションが生まれるわけです。今年で18年目を迎えますが、今では全国28地域を繋ぐ大きなネットワークとなっています。

——TSUNAGUではこれまで、紙を素材としてアート作品を創作するアーティストを多数ご紹介してきました。創作活動において、紙は必要不可欠な存在ですよね？

市販の紙は、色や質感が微妙に変わってしまうので、好きな紙を見つけると買い溜めしておくようにしています。アーティストは一度気に入るとその材料に固執するところがあって、無くなると困るから担保として購入するんですけど、実際には切れ端までしっかり使うからストックはそれほど

減らない(笑)。紙は重いからアトリエの引っ越しの際には苦労しましたね(笑)。

——日比野さんが印象に残っている紙や、気になっている紙があつたら教えてください。

僕は大学2年生のときに初めて海外を旅行したんですけど、その時にフランスの街中で見た古びたポスターが印象的でした。人間は命に限りのある生き物だからこそ輝きを失うことのない黄金や大理石に惹かれるわけですけど、紙は時代や時間の流れに反応して色褪せ、朽ちていくもの。僕としてはその美しさに価値を見出したいという強い思いがあります。丈夫な紙や耐水性のある紙というよりも、その紙を梱包していた包装紙の方が気になるかもしれません。

——コロナ禍によって対面でのコミュニケーションが難しい時代が続いています。アート界にはどのような影響がありますか？

先行きが見通せないで心のなかがモヤモヤするんですけど、このモヤモヤこそがアートの苗床。人間にはモヤモヤすることをはっきりさせたいと思う習性があり、解明しようともがく結果としてアート表現が生まれるんです。モヤモヤの不安感を共有したい、発信したい、表現したいという心の揺らぎがアートを生み出す力になってくるわけです。時代の潮目には必ずその時代の表現が生まれてくるもの。どれだけデジタル技術が進化してハイスピードな解析ができるようになって、人間の基本的な心の揺らぎ方は変わらないので、今の時代だからこそ、これまでにないような新しい表現が出てくるんじゃないかと思っています。



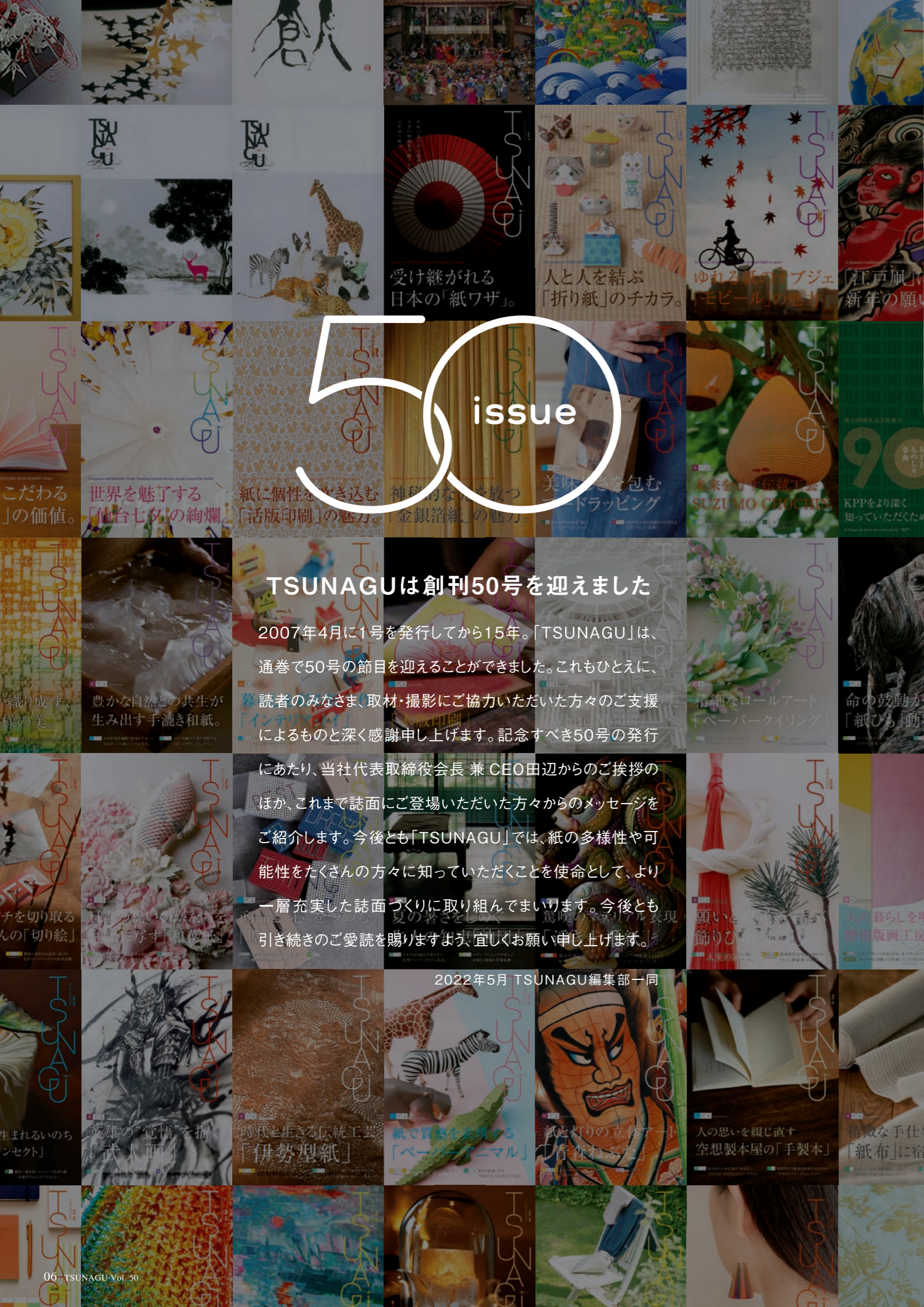
PROFILE

日比野克彦 KATSUHIKO HIBINO

1958年岐阜市生まれ。1983年東京藝術大学美術研究科大学院修了。1982年第3回日本グラフィック展大賞、1983年第30回ADC賞最高賞、1986年シドニー・ビエンナーレ、1995年ヴェネチア・ビエンナーレ出品。1999年毎日デザイン賞グランプリ、2015年文化庁芸術選奨芸術振興部門 文部科学大臣賞 受賞。2007年より東京藝術大学教授。今年4月1日、東京藝術大学学長に就任。他の主な要職として、岐阜県美術館館長、熊本市現代美術館館長、日本サッカー協会社会貢献委員長を務める。

HP(個人): <https://www.hibinospecial.com/>

HP(東京藝術大学): <https://www.geidai.ac.jp/>



50 issue

TSUNAGUは創刊50号を迎えました

2007年4月に1号を発行してから15年。「TSUNAGU」は、通巻で50号の節目を迎えることができました。これもひとえに、読者のみなさま、取材・撮影にご協力いただいた方々のご支援によるものと深く感謝申し上げます。記念すべき50号の発行

にあたり、当社代表取締役会長 兼 CEO田辺からのご挨拶のほか、これまで誌面に登場いただいた方々からのメッセージをご紹介します。今後とも「TSUNAGU」では、紙の多様性や可能性をたくさんの方々に知っていただくことを使命として、より一層充実した誌面づくりに取り組んでまいります。今後とも引き続きのご愛読を賜りますようお願い申し上げます。

2022年5月 TSUNAGU編集部一同



—今年4月に、東京藝術大学の学長に就任されましたが、アートがどのように社会にアクセスし、貢献していくのか。アートが担う社会的な役割をどのように考えていますか？

SDGsには、持続可能でよりよい世界を目指す開発目標として17のゴールがありますが、それに到達する為には一人ひとりが日々の行動を変えていかなければなりません。でも、5年10年と続けていく為には、ゴミの分別によって海に流入するマイクロプラスチック量が減り、その結果として海洋生物の保護につながることを理解して、本当に海や海洋生物を守りたいという気持ちにならなければ目標を達成することができません。つまりは、“人間のこころ”を動かすことが重要なんだと思うんです。アートは、人間の心を対象としているもの。人の気持ちを動かしたり、揺らぎ

をもたらしたり、人の心を変容させる機能を備えるのがアートなのです。SDGsの17のゴールには“芸術”や“文化”の文字はひとつもありませんが、人の心を動かすアートはすべての目標に通じています。アートは、すべての社会問題とつながっていて、その解決に貢献できるもの。*2これからはアートの魅力や可能性を発信しつつ、果たすべき役割を担っていこうと思います。

—最後に今後予定しているプロジェクトなどを教えてください。

東京藝術大学では「芸術は人を愛する」という信念のもと、「I LOVE YOU」プロジェクト*3という活動を進めています。これは社会課題に対してアーティストたちが当事者として取り組み、アートの力を活用することで共生社会の実現を目指す

プロジェクトです。たとえば認知症に効果のある文化的処方はないか、重度の障がいを持つ子どもたちが病院のベッドの上でもアートに触れる機会をつくれなかなど、その人らしさを受けとめたい文化活動ができる方法を考え、実践しています。一人ひとりの違いを面白いと感じるアートの考え方は多文化共生社会の実現につながるもの。藝大には、幅広い芸術領域のアーティストたちの作品のコレクションやアーカイブがありますし、日本中の芸術系大学のコンソーシアムを通してそれぞれの地域にいる大学生や地域産業とつながることができます。これからも文化芸術に関わりのある企業と連携しながら、社会に有益な情報を発信していきたいと思っています。

※1・・・「明後日朝顔プロジェクト」

「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ2003」において、新潟県十日町市助平の廃校になった助平小学校校舎を拠点に、集落の住人と朝顔を育てることからはじまったプロジェクト。人・地域間のコミュニケーションから生まれた活動として、全国29地域が参加しています。

▼写真は、廃校になった助平小学校校舎。



※2・・・東京藝術大学「SDGsビジョン」

東京藝術大学は今年2月、アートや芸術がSDGsにどのようなことができるのかをまとめた「SDGsビジョン」を発表。「SDGsが掲げる社会変革に貢献」「社会との結びつきを強化」「持続可能な大学を目指す」「芸術と社会の架け橋となる人材を育成」「独創的な視点からイノベーションを生む」の4つの核が示されました。



※3・・・東京藝術大学「I LOVE YOU」プロジェクト

現代社会において芸術が担うべき新たな役割、可能性を見つけるために立ち上がった全学的なプロジェクト。科学・医学・福祉等のあらゆる分野とつながり、新たな価値を見出し、社会を豊かに変えていくことができる芸術の力を、多種多様な企画によって発信しています。

HP: <https://iloveyou.geidai.ac.jp/>



手紙は人間の心と心を深くTSUNAGU ♥

TSUNAGUが今号で50号になるという。本業の紙に関わる記事とグラビアからなる上質な広報誌である。友人に進呈するとすごく喜ばれる。広報誌が次々にネット化される時代、一見、贅沢、無駄かと思える広報誌を出し続けるゆとりが実は企業の成長を支えるのだと思う。シュリンクした企業に未来はない。

エッセイスト

植村 鞆音

TSUNAGU50号の歴史の中で、わたしは、22号から「手紙は語る」というエッセイを連載させてもらっている。7年以上前のこと、顔の広い佐藤仁さんが田辺円社長(当時)を紹介してくれた。忖度に縁のないわたしが、サラリーマンを辞めて著述業を目指しているが、一向に執筆の依頼がないと嘆いたら、「うちの広報誌に書いてみたら、ただし紙に関係のある記事」と注文がつき、その場で企画の採用が決まった。物事はすべからず、かくありたい。この会社のさらなる成長を信じ、わたしは、稿料のほぼ全額をつぎこんでこの会社の株を買っている。



創刊50号記念

50 issue

SPECIAL MESSAGE

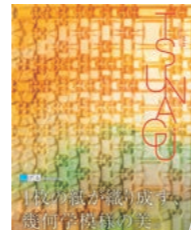
創刊50号発行に際して
心より感謝申し上げます。

「TSUNAGU」通刊50号おめでとうございます！積み重ね続けることは、形づくり、つながっていくことと信じています。これからも紙という素材の素晴らしさをTSUNAGU独自の視点で紹介し続けて下さい。



Vol.28(2016年7月)掲載

「TSUNAGU」のページを繰るごとに、興味深い仕事をする人や新情報が満載で刺激されます。紙の文化は古びることなく生きて動いている、と感じます。50号をひと区切りとして、これからも一号一号を楽しみにしています。



Vol.22(2015年1月)掲載



TOPICS

4/29(金・祝)~11/13(日)
「越後妻有 大地の芸術祭 2022」に参加。
「うぶすなの家」にて作品出展中。
HP: <https://www.echigo-tsumari.jp/>

ORIGAMIアーティスト

布施 知子 さん



広報誌「TSUNAGU」はKPPグループのコーポレートメッセージである「紙でつなぐ、未来をつくる」の情報発信ツールとして2007年4月に創刊、2013年からは年4回の季刊誌として定期発行を続けております。また、2015年からは海外向けに英語版も発行しております。

多くの企業が広報誌の廃刊や電子版への置き換えを進める中、弊社では祖業である「紙」という素材と文字活字による情報発信がデジタル社会の受け皿として時には「画面」から目を離し、「紙面」と向き合うことで心の奥行きを上げ、また紙文化の魅力をお伝え出来ればと願っています。

「TSUNAGU」の特集ページにはこれまで沢山のペーパーアーティストの方に登場していただいておりますが、ある作品は芸術として人を魅了し、ある作品は生活の一部に

溶け込んだ実用品となっています。そして、紙の潜在力を最大限に引き出す作家さんの創作意欲と感性に毎号圧倒されています。

また、弊誌の看板シリーズであるエッセイ「手紙は語る」を連載していただいている植村鞆音さんは直木賞でも知られる作家・直木三十五の甥にあたる方です。ご本人もテレビ東京在職時代には多くの人気番組をプロデュースし、退任後は著述業としても活躍されています。すっかり馴染みとなった「作る」をテーマにした付録も好評をいただいております。

今月号は創刊50号を記念して、東京藝術大学長の要職にあり、段ボールアーティストとしても知られる日比野克彦先生の特別インタビューと、生物多様性を求め森林の再生に取り組んできた故C.W.ニコル氏の遺産「アフアの

森」の特集も掲載しております。

このように「TSUNAGU」は多くの人たちの手によって支えられ、ここに50号という節目を迎えることが出来ました。これからも90回、100回と号を重ね、KPPは「TSUNAGU」と共に持続的な成長を目指し、紙文化の発展に少しでも貢献出来ればと願っております。今後とも読者のみなさんのご声援をお願い致します。

国際紙パルプ商事株式会社
代表取締役会長 兼 CEO

田辺 円



TOPICS

2019年より、一ツ山チエ名義を改めHITOTSUYAMA .STUDIO名義で活動中。

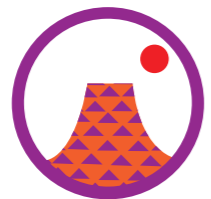


最新情報はホームページにてご確認ください。

HP: <https://hitotsuyamastudio.com/>

クリエイティブデュオ

HITOTSUYAMA .STUDIO さん



HITOTSUYAMA .STUDIO

日本本来の美しい自然環境を取り戻すために
C・W・ニコルさんが思い描いた



創刊50号記念
50 issue
SPECIAL INTERVIEW

C.W.ニコル

作家、ナチュラリスト。1940年、英国ウェールズ生まれ。17歳でカナダに渡り、カナダ水産調査局の技官として北極地域の海洋哺乳類の調査研究を担当。その後、エチオピア・シミアン山岳国立公園の公園長など世界各地で環境保護活動を行ったのち、1980年から長野県黒姫に在住。1995年、日本国籍を取得。執筆活動とともに、講演やメディアを通じて環境問題への提言を続ける。2005年、英国エリザベス女王陛下より名誉大英勲章(MBE)を授かる。2020年4月3日、直腸がんにより死去。享年79歳。

The C.W.Nicol
Afan Woodland Trust

SPECIAL INTERVIEW part.2

誰よりも日本の自然を愛し、生涯にわたって森林保全活動に取り組んできたC.W.ニコルさんの逝去から丸2年。ニコルさんの遺志は彼が創設した(一財)C.W.ニコル・アファンの森財団のメンバーへと受け継がれ、長野県黒姫にあるアファンの森を舞台に豊かな森の可能性を活かす活動が続けられています。ニコルさんが遺した自然再生への思い、またそれを実現するための活動を展開するアファンの森財団の今と未来について、同財団のお二人にお話を伺いました。



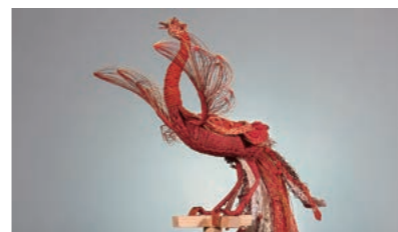
(一財)C.W.ニコル・アファンの森財団
[右]理事長 森田いづみさん / [左]専務理事 野口理佐子さん

TSUNAGU 50th ISSUE SPECIAL MESSAGE

楽しい取材チームのみなさんのおかげで本当に心地よい時間でした。また海外での作品発表の際には「TSUNAGU英語版」にも助けていただき感謝の気持ちでいっぱいです。今も毎月いろいろな方の記事に感心したり、知らないことを知ったりと勉強になっています。これからも紙に関するさまざまなことを心から楽しみにしています。



Vol.34(2018年1月)掲載



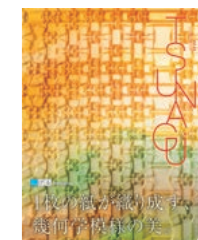
TOPICS

新ブランド「kouhaku」がスタート。
熊本・東京・福岡にて水引工芸教室を継続中。
Twitter : @toshiko_uchino
Instagram : @toshiko_uchino
HP : <https://www.toshikouchino.com/>

水引工芸家
内野 敏子 さん



通刊50号おめでとうございます!「TSUNAGU」掲載を通して国際紙パルプ商事本社エントランスにて作品展示をさせていただいたり、他の作家さん方と仲良くなったり、そのタイトルの通りさまざまな人や機会をつないでいただきました。ありがとうございます!これからも素敵な記事を楽しみにしております。



Vol.22(2015年1月)掲載



TOPICS

4/20(水)~5/29(日)
「富田菜摘展 シャングリラ」会場:中村屋サロン美術館
4/22(金)~5/28(土)
グループ展「Douce Lumière」
会場:UCHIGO and SHIZIMI Gallery

造形作家
富田 菜摘 さん



通刊50号おめでとうございます。Vol.26の特集では、制作エピソードや作品についての思いも取り上げていただき、大変感謝しております。取材当時は大型作品の制作中で、手元の撮影では緊張して震えていたのを記憶しています。今後ますますのご発展をお祈り申し上げます。



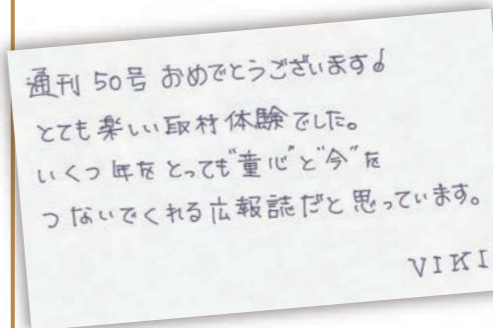
Vol.26(2016年1月)掲載



TOPICS [最新情報はSNSにてご確認ください]

Facebook : 伊藤航/meganemidori
Twitter : @meganemidori_w
Instagram : @meganemidori
webshop : <https://paperproject.base.shop>
HP : <https://paper-project.jimdofree.com>

ペーパーアーティスト
伊藤 航 さん



Vol.34(2018年1月)掲載



TOPICS

4/28(木)~6/27(月)
「愛と狂気のマーケット」会場:ラフォーレ原宿 B0.5F
※作品出展およびフィッティングルームのプロデュースを担当。

感熱アーティスト
VIKI さん



ニコルが夢に見た「100年後の森」を 私たちの手で実現させたい

私財を投じてスタートした
荒れ果てた森の再生活動

長野県北部・黒姫に広がる広大なアフンの森。作家でありナチユリスの故C.W.ニコルさんがつくり上げたこの森の歴史は、1986年にまでさかのぼります。当時の日本はバブル経済の最盛期にあり、大規模な公共工事やリゾート開発による環境破壊が社会問題となっていた時代でした。「日本には多様な生物が住み、自然豊かな土地がある。そうした環境こそが、日本人の健やかな肉体や勤勉で他者を思いやる人間性をつくり上げている要因なのに、自らその環境を壊すなんて信じられない」と。当時のニコルはとても憤っていました。そう話すのは、当時からニコルさんの活動をサポートしてきた森田いづみさん。ニコルさんの亡き後、(財)C.W.ニコル・アフンの森財団の理事長として、さまざまな活動を続けています。

「行動で示せば日本人の理解が得られる」と考えたニコルさんは、自宅を建設するために購入していた黒姫の土地を起点として周囲の荒れた森林を買い足し、その再生に取り組みはじめます。びっしりとはびこった下草を刈って間伐を行い、鳥も飛べなかった真つ暗な森に太陽の光を届ける。ニコルさんは森田さんをはじめ黒姫の自然を知り尽くした地元の実業家・松木信義さんらの力を借りながら、時間と手間をかけて森の再生を歩ずつ進めていきました。



森田いづみさん
(財)C.W.ニコル・アフンの森財団 理事長

また野口さんも「ニコルが子どもの頃から触れ合ってきた、本来の『良い森』の姿を私たちの世代は知りません。彼が亡くなった今、アフンの森をその理想にどう近づけていけるかが私たちの使命だと感じています。彼が信念としていた森との対話、どんなことをすれば森が喜ぶか、または嫌がるのか。森が返してくれるリアクションを受け止めながら、日々森の再生に向き合っていきたいです」と同財団の展望を語ります。

さらに、今後はアフンの森に眠る生物資源の活用方法として「森のフレバーが楽しめるビールやジン、アロマなど、森の恵みをかたちにして製品化することを計画中です」と野口さん。「日本は資源に乏しいと言われるけど決してそんなことはない。たくさん恵みに囲まれているんだ」とニコルはよく話していました。豊かな森をつくればそこに価値が生まれ、経済も豊かになる。そんな良い循環が生まれることを彼はめざしていました。アフンの森がそれを実現し、他の地域に広がっていくことを願っています」と次の

多種多様な生き物たちの「ノアの箱舟」*にすることでした。絶滅の危機に瀕している生き物がアフンの森に集まり、やがてまた外の世界へと出ていける場所となることを理想としていたのです。

やがて2000年代に入り、還暦を迎えていたニコルさんは「将来、自分がいなくなった後もアフンの森が続いていくためには、どうすればよいか」と森の未来について考えはじめます。そして、当時仕事で関わりのあった野口理佐子さんに相談したのです。「ニコルが私財をつぎ込み、森を広げていると聞いたときはとても驚きました。彼が育てたアフンの森という資産を守り続けるには財団法人化することがベストな選択でしたが、当時は乱立する財団法人への天下り問題が世間を騒がせていたとき。世の中の流れに逆行する財団法人化を実現するのは至難の業だと言われましたが、約1年にわたってニコルとともにたくさん資料を抱えて長野県庁を訪問し、2002年によく『C.W.ニコル・アフンの森財団』を設立することになりました」(野口さん)。

心のケアや環境教育など 森の有効性を利用した活動

アフンの森では森の再生だけでなく、森に集う動植物の調査研究さらには虐待を受けた子どもや障がいを持つ子どもを森に招き、自然体験を通して心の傷を癒すプログラムを実施するなど、森林再生の枠を超えた活動を展開しています。東日本大震災発生直後の2011年8月には、

津波被害にあつた宮城県東松島市の子どもたちとその家族らにアフンの森に招待。「自然で傷ついた心は、自然で癒やすしかない」と、豊かな森の中で体を休め、心を解放する時間を提供しました。

アフンの森財団はその後、震災復興プロジェクトを立ち上げ、被災地域の人々と協力しながら宮城県東松島市に木の温もりと香りに包まれた宮野森小学校の校舎を建設。また隣接する里山には自然との共生を学ぶための「復興の森」を整備しました。被災した人々の心に寄り添ったこれらの活動は大きな反響を呼び、自然と共生する森の学校は復興のシンボルとして地域の方々にも活用されています。

同小学校では、2016年から国際紙パルプ商事との共催で、和紙の原料となる楮・三椏の植栽と紙漉き体験のワークショップを開催。和紙作家のアウトンボーガルド・ロギールさんを講師に招いたこの特別授業には、ゲストとしてニコルさんも参加しました。作家として多くの著作を持つニコルさんは「紙があつたからこそ本が生まれ、豊かな文化が育まれた」と、森の恵みである紙の魅力について子どもたちに語りかけたそうです。「森を健全な状態に戻すためには増えすぎた木や生育状態のよくない木を伐りだす必要があるのですが、自然保護といえながら木を切るんだと批判を受けることも多かったです。ニコルは、木を伐りだし、活用することの大切さを強く訴えていました」(森田さん)。「自分の手で木を植えて、刈り取って、そこから紙をつくる。自分たちの



野口理佐子さん
(財)C.W.ニコル・アフンの森財団 専務理事

暮らした森のつながりを実感できる体験は非常に貴重で、参加した子どもたちにも大変好評でした。今後ぜひ継続していきたいです」(野口さん)。

ニコルさんの思いを継いで 理想の森をつくり上げる

2020年に「ニコルさんがこの世を去った後も、その思いを受け継いだアフンの森財団の活動は、歩みを止めることなく続いています。『森の再生に取り組みはじめたとき、ニコルはアフンの森が100年後、自然のかたちに近い状態になってほしいと願っていました。10ヘクタールからはじまったアフンの森は、現在、人工林再生のために国から借り受けた国有林を含めて63.5ヘクタールにまで広がっています。森を大きくすることは、より大きな生態系の再生につながります。ニコルが夢見た100年後の森を実現するために、今後も森のトラスト(拡大を進めていきたいと思います)」(森田さん)。

ビジョンについても話してくれました。

また、ニコルさんが思い描いた100年後の森と彼の人生を題材にしたショートアニメーションの企画も進行しているそうです。「未来を映像にすることはできませんが、アニメーションを通してビジョンを共有することはできます。100年後のアフンの森にはどんな花々が咲き誇り、どんな生き物でにぎわっているのか。できるだけ生物学的データに基づいた森の姿を描き出し、彼の思いとともにたくさんの人に届けることができたらと思っています」(森田さん)。

ニコルさんが人生をささげ、よみがえらせたアフンの森。今なお再生し、進化を続けるこの美しい森は、これからもたくさんの方々に伝えていきたいと思います。

(一財)C.W.ニコル・アフンの森財団

「日本本来の自然を取り戻し、子どもたちの笑顔あふれる豊かな社会を目指すこと」、「100年先の未来のために生物多様性豊かな森を広げること」をミッションとして、2002年に設立。長野県黒姫にあるアフンの森を中心とする森林保全活動を通じて、地域の自然共生型社会づくりを展開する。

英名 THE C.W. NICOL AFAN WOODLAND TRUST
所在地 長野県上水内郡信濃町大井
HP <https://afan.or.jp/>

(一財)C.W.ニコル・アフンの森財団が進める 森林創生に対する新たな支援をスタート

KPPは2015年よりオフィシャルスポンサー契約を継続してきた、(一財)C.W.ニコル・アフンの森財団への新たな支援を開始。南エリアの森林整備活動に協賛することで新しい森林の価値を創出するとともに、持続可能な社会の実現を推進していきます。

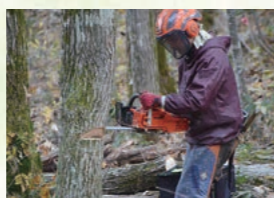


■本件に関するお問合せ
国際紙パルプ商事株式会社
コーポレート・コミュニケーション室
TEL 03-3542-4169



① 森の現状を調べる—生物調査

整備に着手する前に、森の現状を把握するための生物調査を行います。植生が単一になっていないか、希少種の有無など、動植物たちの生態を含めて森の現状を把握します。



② 森を整備する—整備方針の作成

森の現状を把握したうえで、その森をどのような森に育てるのか整備方針を策定します。絶滅危惧種がいればその種を守るために必要な環境を整えつつ、100年後を視野に入れた森づくりを行います。



③ モニタリング—順応的管理

整備したエリアも同様に生物調査を実施します。整備したことがどのように影響しているのか、生き物の声を聞きながら整備を繰り返していきます。

news
02 | サステナビリティ・カタログ
「エンビロンズ」のご紹介

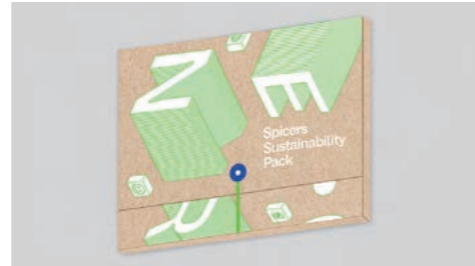
サステナビリティの重要性がますます高まる中、KPPグループではグループ全体で環境負荷低減に資する商品やサービスの開発に取り組んでいます。グループのメンバーであるスパイサーズ[※]は、この度、環境負荷低減に資する商品を一挙に掲載したカタログ「エンビロンズ」をリリースしました。

「エンビロンズ」では、サステナブルな紙ベースの商品やポリプロピレン商品、非塩化ビニル商品などを紹介しています。商品紹介だけでなく、スパイサーズの「サステナビリティ宣言」、サステナブルな目標と実践、サステナブルな商品設計のために考慮すべきヒントなど、さまざまなコンテンツを盛り込んでいます。

スパイサーズは将来世代が必要とするものを損なうことなく、今の市場のニーズを満たすことを大切にしており、これからもオセアニア地区の有力ブランドのために革新的でサステナブルなソリューションを創造します。

「エンビロンズ」は2022年6月より発売開始。オーストラリアのメルボルンで開催されるバックプリント・トレードショーで紹介される予定です。

[※]オセアニア地区紙商のリーディングカンパニー。
ハイエンド向けの印刷物やパッケージ、サイネージ等のソリューションを提供。



Sustainable targets and practices

Spacem is working towards achieving targets for energy consumption, CO₂ emissions and sustainable practices in our operations.

TARGET	BASELINE FY 2020	FY 2021	FY 2022
40% Reduction in Electricity usage and Greenhouse gas emissions of operations and investment activities	100%	93%	89%
100% Fibre-based products with CFC-FCI Certified or FSC Certified	79%	82%	85%

MESSAGE



サイン&ディスプレイ部門
マネージャー
ウェイン・フッド 氏

顧客の環境配慮へのご要望に対応することが、スパイサーズの成長戦略です。私たちは顧客の製品製造から原材料廃棄まで、そのプロセス全体を見てきました。地球を守るために、私たちはサプライヤーや顧客とパートナーシップを結び、コラボレートしていることに自信を持っています。



サプライチェーン部門
ジェネラルマネージャー
ケン・ブース 氏

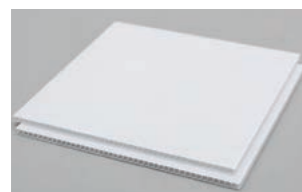
責任ある調達、当社のサステナビリティアプローチの重要な部分です。サプライヤーが合法的かつ適切に管理された森林や再生資源から原料を調達していることを確認するため、包括的かつ適正な評価手続きを踏んでいます。私たちは可能な限りオーストラリア製のカーボンニュートラルなリサイクル製品を提供したいと考えています。



マーケティング&
デザイン部門マネージャー
シンディ・セティア 氏

「エンビロンズ」は、デザイナー、設計者、コンバーター向けのツールであり、リソースでもあります。素材、生産工程のほか、製品の販売、使用、廃棄方法までを考慮するサステナブルな選択肢を提供しています。

スパイサーズが提案するサステナブルな選択



ファイバー由来

紙ベース商品は、塗工、非塗工などの市場をけん引する素材に加え、他とは一線を画すユニークな商品も提供します。



ポリプロピレン

硬質ポリプロピレン商品は、リサイクルプログラムのさまざまな用途に適した汎用性の高い素材を提供します。

非塩化ビニル

非塩化ビニル商品は、市場における関心と需要の高まりに応え、より環境に優しいソリューションを提供します。

上:「コーフルート」…屋内外で使用できるリサイクルに適したポリプロピレン商品。
下:「リボード」…独自加工の溝付きコアを配したFSC認証の硬質紙コアボード。強度と硬性に優れ、非常に軽く運搬や組み立て、解体が容易。

商品に関するお問合せ

国際紙パルプ商事株式会社
コーポレート・コミュニケーション室
TEL: 03-3542-4169
MAIL: kpp_cc@kpp-gr.com

右記QRコードから、サステナビリティ・カタログ「エンビロンズ」の詳細がご覧いただけます。



持続可能な社会実現に向けた、KPPグループのあくなき挑戦をご紹介します

KPP Sustainable Times

限りある資源やエネルギーを循環・再生させることは、現代社会において極めて重要な課題となっています。当社は経営理念である「循環型社会の実現」に基づき、事業を通してサステナブルな社会づくりに貢献し、企業価値の向上を図っています。

news
01 | 非プラスチック製品の原材料販売と製造を手がける
株式会社アミカテラと資本業務提携を締結

当社グループは、植物由来で非プラスチック製品の原材料販売と製造を手がける株式会社アミカテラへの出資を行いました。同社は「地球に、優しく」をミッションに、セルロース残渣^{ざんさ}*や間伐材等の廃棄されてしまう植物を原材料として製造された非プラスチック製品「modo-cell[®]」(モドセル)の卸売・製造販売に取り組んでいます。近年、深刻化している海洋プラスチック汚染問題に対して、生分解性を持つ同社製品や製造技術を活用することにより、環境負荷低減を実現できることから、この度、出資を決定いたしました。今後、両社は本出資を通じて協業関係を深め、アミカテラ社製品の活用をはじめとして持続可能な循環型社会の実現に向けた取り組みを進めてまいります。

植物由来のサステナブル素材
「modo-cell[®]」とは?

植物繊維(セルロース)・でんぷん・植物由来の天然樹脂・水を原材料に使用。放置竹林の竹や稲わら、トウモロコシの芯など、これまで廃棄されていた資源を無駄なく活用し、使用後は地上・海洋での生分解が可能のため、自然環境への負荷がありません。また、製品製造の過程で出るセルロース残渣や地域で発生する農業廃棄物を原料として使用することもできるため原料枯渇の懸念がなく、石油由来資源でできた容器などの代替素材として期待されています。



「modo-cell[®]」を使用した製品例。「modo-cell[®]」は専用の成型設備が不要。熱硬化性と熱可塑性の両面の性質を持つため、既存のプラスチック成型工法のすべてに適用する。

「modo-cell[®]」の特長

- ①植物が主原料となるため、従来廃棄していた植物系残渣^{ざんさ}*なども原料として活用できる
- ②主原料が植物であるため、地上・土中で完全生分解される
- ③成型に独自の金型などは不要で、一般的なプラスチック成型機械での製品製造が可能
- ④放置竹林や農業廃棄物の処分対策に有効
- ⑤原料となる植物の特性を製品にも反映することが可能

[※]残渣(ざんさ)……原料となる液体や固体などから目的の成分を取り除いた後に残る不純物や絞りかす。



株式会社アミカテラ

所在地 東京都江東区富岡1-12-8
アサヒビル307
代表取締役会長 増田 厚司
代表取締役社長 古賀 緑
事業内容 植物性かつ生分解性のプラスチック代替素材
(modo-cell[®])製品の開発・製造販売
設立年月日 2016年11月7日
HP https://amica-terra.com/



▶ サステナブルな成長戦略をサポートする ビジネスソリューションサイトを開設

国際紙パルプ商事では、紙総合商社ならではの幅広い商材とグローバルネットワーク、社会や地球環境に適応した持続可能な成長戦略に関する知見とノウハウを基に、お客様の多様な経営課題に最適なプランをご提案するビジネスソリューションサイト「SHIFT ON」を開設しました。

素材商社として磨いてきた100年近くの経験をもとに、お客様の理念や目標から「ありたい未来」をともに描き、素材と仕組みで実現していくことをめざしています。

まずは、「環境」「パッケージ」「販売促進」の3事業領域において、当社が長年蓄積した素材選びやリサイクル等の仕組みづくりに関するノウハウ、新素材やさまざまな業界での取り組みのトレンド、グローバルに広がるネットワークを活用して、お客様の事業課題に最適解を提案し、持続的な事業の発展に貢献してまいります。



SHIFT ON

<https://shifton.kpp-gr.com/>



■本サイトについてのお問合せ

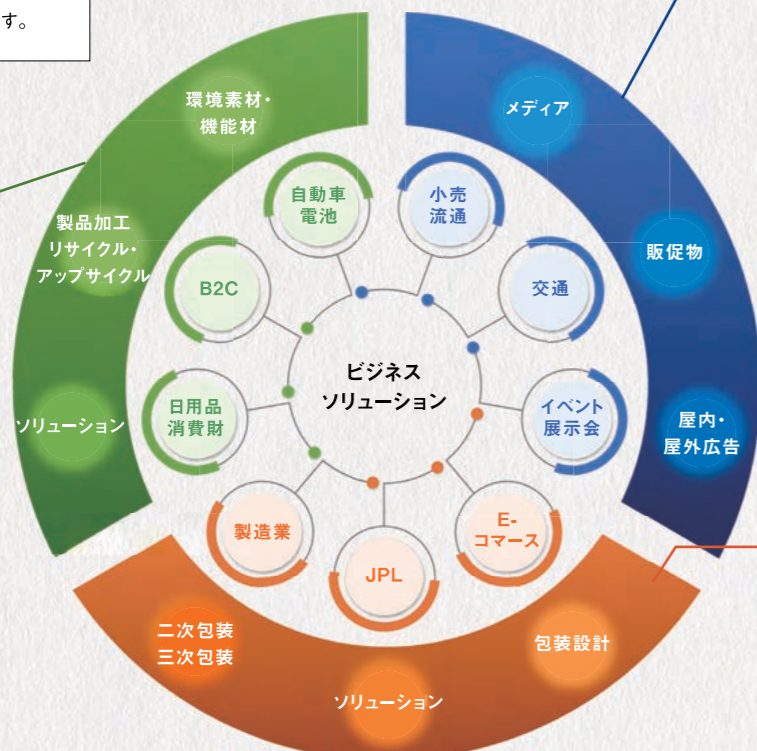
国際紙パルプ商事株式会社 マーケティング室

TEL 03-3542-6851

MAIL kpp_marketing@kpp-gr.com

「SHIFT ON」のMISSION

ESGやSDGs、マテリアリティ、パーパスなど社会と企業の向き合い方が変わる中で、経営を取り巻く課題に対する新たな解決方法を提案し、お客様の事業に貢献します。



環境・機能材ソリューション

紙やバイオマスプラスチック、生分解性プラスチックといった素材からお客様の目的に最適な素材を提案するとともに、それらの加工、消費後の再原料化の工程まで、ライフサイクル全体を通したソリューションをご提供しています。

環境・機能材に関するソリューションについてのお問合せ

TEL 03-3542-4170

MAIL kpp_green_solution@kpp-gr.com

販促製品の
トータルソリューション

紙・フィルム・合成紙など多彩なメディアをラインナップし、販促製品に最適な素材選びや印刷・加工・アッセンブリー・配送を通じて貢献しています。

販促製品に関するソリューションについてのお問合せ

TEL 03-3542-9911

MAIL kpp_promotion_solution@kpp-gr.com

パッケージソリューション

物流・パッケージ分野での環境負荷低減のご提案や包装・緩衝材設計技術を有し、梱包プロセスの最適化によるトータルコスト削減も手掛けています。

パッケージソリューションについてのお問合せ

TEL 03-3542-4174

MAIL kpp_packaging_solution@kpp-gr.com



news
03

バイオマス発電事業の最適化ソリューションを提供する新会社を設立

本誌44号(2020年9月)にてご紹介した、最新テクノロジー活用のバイオマス発電所運転支援システム「BMecomo」の開発および販売を主要事業とする子会社を設立しました。

株式会社BMエコモは、さらなる事業の拡大と効率化、迅速な意思決定などを目的として、インドに本社を置くITベンダーであるEnvision社との共同出資により設立しました。Envision社はさまざまなIoTソリューションを自社開発しており、今後、人材の高齢化、設備の老朽化などの課題を抱える日本の産業分野などに対して、Envision社と株式会社BMエコモとの協業によりIoTソリューションを展開・販売する予定です。

また、今後も脱炭素化社会やサーキュラーエコノミー(循環型経済)の実現など、バイオマス発電市場を取り巻く外部環境の変化を背景として、企業廃棄木材のエネルギー利用スキームをはじめとする燃料販売事業とBMecomo事業をより一層成長・展開させ、社会課題の解決と当社グループの企業価値向上の両立をめざします。

「BMecomo」とは?

「BMecomo」は、バイオマス発電所から得られるあらゆるデータを収集・解析し最新のテクノロジーの活用と徹底的な「見える化」により、日々運転を続けるバイオマス発電所の収益最大化を支援するサービスです。高度なIoT管理により、燃焼効率化・最大発電量の維持、それを下支える熟練運転員のノウハウを次世代へ継承。さらには長期にわたる持続的な経営・管理の実現や日々発生する設備トラブルへの対処といったさまざまな課題解決を支援するほか、発電所の現場、責任者とステークホルダーをつなげる情報共有プラットフォームとして発電所の意思決定、企業価値・事業価値の向上に役立てていただきたいと考えています。当社は「BMecomo」により、これまでにない新たなバイオマス発電事業の創出をめざしています。

- 2018年 ● KPPグループが推進している「総合循環型ビジネスモデル」の一環として「BMecomo」の開発をスタート
- 2019年10月 ● バイオマスパワーテクノロジーズ (KPP出資バイオマス発電所)での実証運転を開始
- 2021年11月 ● 三重エネウッド株式会社(本社:三重県松阪市)へ「BMecomo」のサービス提供開始(詳細は本誌45号にてご紹介しています)
- 2022年3月 ● 株式会社BMエコモを設立



BMecomo
Biomass Meister

株式会社BMエコモ

所在地: 東京都中央区明石町6-24

お問合せ: 03-3542-9924 (受付時間:月~金/9:00~17:00)

BMecomo特設サイトはこちらのQRコードからチェック!▶

<https://bmecomo.com/>

サービス紹介動画はこちら



NEXT

次号では、「BMecomo」の導入事例や機能の一部であるセンサーソリューションなどを紹介します。

「手紙」は語る

植村 鞆音

人間は表現する動物だというのが、手紙は人間の表現のなかでもっとも深く高貴なものだと思う。手紙は手書きがいい。眼光紙背に徹すれば、書き手の人となりが見えてくる。

第二十八回 前田 仁

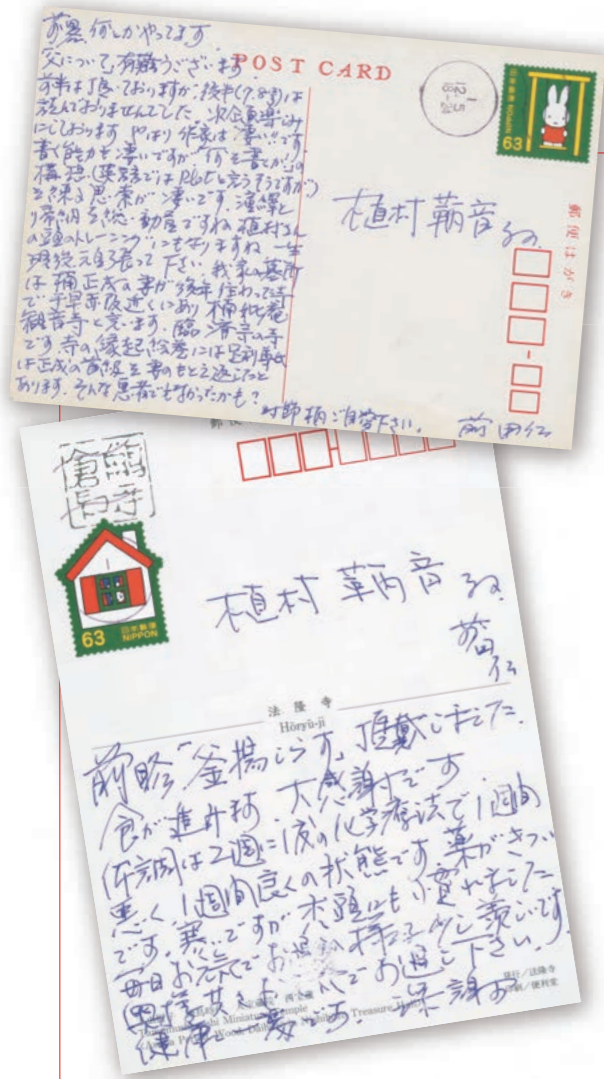
キリンビバレッジの社長だった前田仁さんは「ハートランド」「一番搾り」「淡麗」などの開発で知られる。初めて会ったのはわたしがテレビ東京で営業を担当していた頃だから、たぶん二十七年前、平成七年だったはずだ。主要広告主の宣伝担当に秋の京都を案内するイベントがあつて前田さんと知り合った。前田さんはわたしより十歳年下で、当時キリン本体のマーケティング部長だったが、知的でかわいいた笑顔がわたしを魅了した。前田さんのほうもわたしを憎からず思つたのだろう、すぐに二人は仲良くなつた。私的に連れ立って、関西や上高地、新潟などを旅行したこともある。わたしは営業はズブの素人だったから、前田さんに教わるが多かった。わたしは二年余りで営業担当を外れ関連の番組制作会社に転じたが、以降、前田さんが亡くなるまでの二十五年あまり、同じように交友は続いた。関連会社配転の際も、当時のキリン社長・佐藤安弘さんにたしか青山のブルーノートかどこかで異動のお祝いをしていただいたこともある。すべて前田さんの計らひだった。

前田さんとわたしとの仲がいいのを当時電通のキリン担当の営業局長だった若杉五馬さんが、「前田さんは営業よりクリエイティブが好きだからな」とつぶやいたことがあつた。あるいはそれが当たつていたかもしれない。わたしは編成、番組制作の知育者だったので、もみ手の営業行為は不得手だったが、クリエイティブについては自分なりの。すべて前田さんの計らひだった。

前田さんとわたしとの仲がいいのを当時電通のキリン担当の営業局長だった若杉五馬さんが、「前田さんは営業よりクリエイティブが好きだからな」とつぶやいたことがあつた。あるいはそれが当たつていたかもしれない。わたしは編成、番組制作の知育者だったので、もみ手の営業行為は不得手だったが、クリエイティブについては自分なりの。すべて前田さんの計らひだった。

「父について」有難うございませう。やはり作家は凄いです。書く能力も凄いですね。が、『何を書くか！』の構想を練る思考が凄いです。演繹と帰納を総動員ですね。植村さんの頭のトレーニングにもなりますね。一生現役。頑張つて下さい。」

「父について」は小さな月刊経済誌に二年間連載したものだ。これはその感想を伝える葉書の一部分である。リップサービスもあるだろうが、前田さんからの手紙はなにより好意に溢れている。臆病で小心なわたしが温かい手紙でどんなに励まされ勇気づけられたことか。



前田 仁

キリンビバレッジ 元代表取締役社長
全国清涼飲料連合会 元会長
1950-2020

1950年山梨県に生まれ大阪府で育つ。関西学院大学経済学部卒業後、1973年に麒麟麦酒株式会社に入社。1980年から東京本社営業部&マーケティング部でマーケティングを担当し、ビール、ワインの商品企画、開発に従事。キリン一番搾り生ビール、麒麟淡麗(生)、水結などのヒット商品を生み出した。以後、グループ企業の重職を担ったのち、2009年にキリンビバレッジ代表取締役社長、2010年に全国清涼飲料連合会会長に就任。2020年逝去。享年70歳。

意見を持つていたので、それを遠慮なく自由に表現した。それが前田さんのお気に召したかもしれない。わたしが営業担当から番組制作会社へ異動した直後だった。前田さんから当時人気の「ドロッカー」を番組にしてみないかという問いかけがあり、キリン提供、わが社の制作で実現した。あれは、わたしの異動のお祝いと励ましの意味があつたのかもしれない。番組制作会社での勤務は数年で終わり、その後わたしは著述業を目指したが、相談ことがあるたび前田さんの意見を訊いた。前田さんはいつも真摯にわたしの話に耳を傾けてくださった。わたしは二冊目と三冊目の著作上梓の際には分もわきまませず盛大に出版記念会を開いたりしたが、前田さんは二回ともパーティに出席したうえ、自社製の飲み物を提供してくださった。

ゴルフも数えきれないくらい一緒に緒した。おつき合いが始まったころはいいカモだったが、役職が上がるにつれ上達され、晩年はこちらがいいカモになった。なにごとに対しても論理的だったので、ずいぶん研究努力されたのだろう。

晩年のつき合いは、学士会館で二、三か月に二回くらいの頻度で開催する「ともね会」と「夫婦の会」が主だった。「ともね会」は異業種の交流会、「夫婦の会」は五組の夫婦の会食会である。いずれもさみしがり屋のわたしが発案して始まった。ゴルフも数えきれないくらい一緒に緒した。おつき合いが始まったころはいいカモだったが、役職が上がるにつれ上達され、晩年はこちらがいいカモになった。なにごとに対しても論理的だったので、ずいぶん研究努力されたのだろう。

「体調は2週に1度の化学療法で1週間悪く、1週間良くなる状態です。薬がきついです。寒いです。奥様共々お元気でお過ごし下さい。健康一番です。深謝」わたしはいわず語らずで、前田さんの「覚悟」を感じとっていた。亡くなったのが令和二年六月である。メールの履歴をみると亡くなる二月まえの五月十八日付でメールをいただいている。「メールありがとうございます。新しい治療薬でGanther初めて下がったが、胸水貯まったり、腸管閉塞で点滴入院です。なかなかすんなり行かないですね、癌と薬が私の身体の中でバトルです。頑張ります。感謝です」。

思えば、この年春先まで前田さんは生きようとされていた。二月三日には写真付きのメールが届いている。前々日、家族とともに古希を迎えた喜びが表現されている。「2/1、70才古希になりました。昨夏は諦めてました。薬の後遺症がきつくと、子供たちが用意してくれた箱根湯元泊古希の会に行けるかどうかギリギリまで保留でしたが、出掛けることができました。子供と孫達総勢12人の会でした。楽しく嬉しい会でした。帰りに三宮吾妻山に女房、長女とチャレンジ。助けられて300階段昇りました」。写真には二面の菜の花畑を背に妻の泰子さんに寄り添われて満足顔の前田さんが写っている。お嬢さんが撮つたのだろう。お二人の写真を目にするたび胸の中を熱いものがこみあげる。



著者略歴
植村 鞆音 エッセイスト

小説家・直木三十五の甥、東洋史学者・植村清二の子として愛媛県松山市に生まれる。1962年早稲田大学第一文学部史学科卒業後、東映を経てテレビ東京に勤務。同局常務取締役、(株)テレビ東京制作代表取締役社長等を歴任。2005年「直木三十五伝」で尾崎秀樹記念・大衆文学研究賞受賞、2007年「歴史の教師植村清二」で日本エッセイスト・クラブ賞受賞。主な著書に「夏の間」『気骨の人 城山三郎』など。



Antenna Books & Cafe

ココシバ

埼玉県川口市芝5-5-13

TEL 048-499-1719

営業時間:11:00~20:00

月曜定休

※イベントの開催によって変更になる場合があります。ご来店の際には、ホームページ内に掲載されているカレンダーにてご確認ください。

<https://cocoshiba.com/>



地域の人々のつながりを生み出すコミュニティブックカフェ

京浜東北線「蕨駅」から徒歩約5分。埼玉県川口市の芝銀座商店街にある「Antenna Books & Cafe ココシバ」(以下、ココシバ)は、地域に根差したブックカフェとして2018年にオープンしました。「お客さんがやりたいこと、得意なことを企画してくれるんです」と話すのは、共同経営者の一人である小倉美保さん。その言葉どおり、掲示されているカレンダーは、ジャンルのバラバラなイベントで埋め尽くされています。その一端を紹介すると、お店で取り扱っている本の著者によるトークイベントや青空読書会といった本に関連するものから、花の絵画展やクラブ作品の販売会、落語会やジェンダーをテーマにした歓談会など、多面的なイベントが盛りだくさん。また、川口市周辺に多く居住するクルド人の

ための日本語教室や、「オヤ」と呼ばれる伝統的なレース編みを教える手芸教室など、多文化共生エリアならではの催しも定期的開催されています。また、毎週水曜日に開催されている「ココシバミーティング」は、お店を経営する3人の定例会議を一般客にも公開するもの。「イベントを主催する人や参加する人など、いろいろな人からお店の運営に口を出してもらおうと思って。会場を提供する代わりにカフェの手伝いをしてもらうなど、私たちも含めてみんなが楽しく交流できることが大切なんです」(小倉さん)。

ココシバの棚に並ぶ新刊本は、文学・社会・歴史・哲学・宗教などの専門書が中心。小倉さんは小さな出版社の経営者でもあり、本の作り手としての視点から選書したラインナップは、そのタイト

ルだけを見ても気になるものばかりです。「少し難しそうに感じる本や普段読み慣れていないタイプの本であっても、試しに買っていってくれるお客さんも多いですね。新しい世界に触れるきっかけになってくれたらうれしいです」と小倉さん。

今年4月、同じ商店街の中に、趣味の教室やワークショップ、物品販売などに使えるシェアスペース「スペースとプラン」を新たに開設。ココシバと併せて、今後も交流の場を提供し続けていくそうです。「大人になってから本当の友だちをつくるのって結構難しいと思うんですよ。もともと知り合いでも何でもなかった人同士が出会い、友だちになるきっかけづくりができればいいですね」と小倉さん。ココシバは、都会の中で薄れつつある人と人のつながりをつくる場となっています。



輸送マイルージとCO2排出を抑え、地球温暖化に配慮したライスインキを使用しています。



針金・糊・熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。



国際紙パルプ商事株式会社
KOKUSAI PULP&PAPER CO.,LTD.

発行:コーポレート・コミュニケーション室
〒104-0044 東京都中央区明石町6番24号
TEL (03) 3542-4111 (代)

URL <https://www.kppc.co.jp>